『日本永代蔵』異版（西沢版系統）巻一（江長）―翻刻―

前田知穂

はじめに

本稿は井原西鶴『日本永代蔵』（貞享五年正月刊）の異版である、通称「西沢版系統」とよばれる版本の一つ「柏原屋版」の翻刻である。諸本などの書誌的事項の詳細については、後日拙稿（『『日本永代蔵』異版（西沢版系）巻六―翻刻と解題―』）にて発表する予定であるが、本稿において底本とした西沢版系統について簡単に触れておく。西沢版系統は、貞享五年五月に京都の書肆である西沢太兵衛によって出版された「西沢版」を初版とするが、これは全六巻六冊のうち巻六（京長）の一冊が天理図書館に所蔵されているほかは所在が明らかになっていない。柏原屋版は、大坂の書肆である柏原佐兵衛によって刊行され、西沢版と同一の版木を用いたとされており[1]、柏原屋版によって西沢版の原態を推測することができる。底本にはこの柏原屋版を影印・複製した『異版日本永代蔵』（古典文庫21　西鶴学会編、吉田幸一解説、一九四九年刊）を用いた。

西沢版系統は『日本永代蔵』の初版である「三都版（森田版系統）」所収の各章をその舞台となった江戸・大坂・西国・東国・近畿・京都の六つの地方別に分類し、各地方に一巻ずつをあて、六巻六冊に再編集して出版された。この西沢版系統には誤脱・削除・改竄の多さや、平仮名を多用するなど、初版である三都版の原型を留めていないことから、従来「森田版（三都版）を杜撰に利用したもの[2]」という評価が下されてきた。

しかし、そうした評価をもたらしてきた誤脱・削除・改竄の実態については十分に検討されてはこなかった。削除・改竄が著しいものとして、しばしば西沢版系統巻一の五「煎じやう常とはかはる問薬」（三都版では巻三の一）が挙げられており、確かに当該章は三都版（森田版系統）の本文の原型を留めているとは言い難い。しかし、その改竄のあり方はその他の章とはまったく様相が異なり、当該章のみをもって西沢版系統の特徴を代表させることはできないのである。

また西沢版系統の初版である西沢版は、西鶴生前における唯一の異版であり、三都版（森田版系統）の刊行後わずか四か月という異例の速さで出版されるなど、出版事情においても決して軽視すべきものではない。近年では中嶋隆氏によって、西沢版の出版に西鶴の関与があるのではないかとする説[3]も提唱されている。

西鶴の関与の可能性も含め、西沢版系統の研究にあたっては、その誤脱・削除・改竄等の詳細を三都版（森田版系統）との比較などを通して明らかにする必要がある。そのため、本稿では初めて「西沢版」の原型を保持するとみられる「柏原屋本」を全冊翻刻するとともに、「森田版」の本文を対照として挙げることとした。

【書誌】

今回、翻刻の底本とした「柏原屋版」や「三都版」などの書誌に関する詳細は、「『日本永代蔵』異版（西沢版系）　巻六（京長）―翻刻と解題―」に掲載する。

【凡例】

翻刻に際しては、可能な限り底本の形を忠実に再現することを心掛けたが、活字化に際して左の方針に従った。

一、原則として現在通行の字体に改めたが、当時慣用されていたと思われる漢字表記などはそのまま残した。

一、特殊な合字や連体字は通行の仮名に改めた。

一、撥音便などを示す小字で記された片仮名は小さく組んだ。

一、漢字と仮名に両用される「見」「世」「不」「屋」などの判断については、文意・文脈・字体によって区別した。

一、誤字・誤刻・脱字・衍字・当て字・濁点の錯誤などについては、原則としてそのまま残し、その箇所を脚注に注記した。

一、振り仮名（ルビ）・踊り字・反復記号については、底本の通りとした。

一、句読点は「。」に統一した。これらの底本における原態については、前述の解題に記す。

一、底本の表記が虫損・破損・汚損・印刷不鮮明などで判別不可能な場合には可能な限り別本で補った。別本を用いてもなお判別不能な破損箇所には文字数相当に□を付し、文字が推定されうる場合にはルビとして、括弧に入れ、示した。そのような箇所が本文の振り仮名であった場合や、三都版の表記によって文字が推定される場合には、脚注に注記した。

一、底本と別本の表記に異同が生じる場合については、原則として底本の表記を採用したが、底本の表記不鮮明などにより、別本の表記が底本の表記の原態を表していると判断した場合には、別本の表記を脚注に注記した。

一、翻刻に用いた別本は立教大学図書館所蔵の西沢版系統の『日本永代蔵』を用いた。当該別本は西沢版の巻の順序を改編した無刊記大本であり、本稿で翻刻した柏原屋本と同一の版木を用いていると思われる。別本の詳細な書誌についても前述の解題に記す。

一、異版と三都版の対照に際し、異版における行移りごとに、その箇所に対応する三都版の本文を左隣に、一字下げで示した（目録については、三都版の該当箇所を一括して示した）。

一、行移りは底本の表記通りに示し、行の順番を○に入れた数字で示した。三都版については異版の行移りにしたがって示したが、その結果、漢字の表記などの都合上、二行にわたる場合には、原則として前行に示した。以下に例を示す。

例

異版（一丁ウラ十五行目）ぎにあたまつき跡あがりに。のぶながじだいのしたてぎる物そで下せはしくす|

三都版（巻一・三丁オモテ九行目～十行目）義にあたまつき跡あがりに。信長時代の仕立着物袖下せはしく裾

異版（二丁オモテ一行目）そ|まはりみぢかく。うへした共につむぎのふとりをむもんの花色そめにして。同じ

三都版（十行目～十二行目）まはり短く。うへした共に紬のふとりを無紋の花色染にして。同じ

一、丁移りは各丁表裏の末尾に、丁付と表・裏（オ・ウ）を括弧に入れて示した。異版の丁付の先頭には、底本の表記に基づき「〇」を入れた。三都版については各章の掲載巻の丁付を示した。

一、挿絵は該当する箇所に丁付と表裏を示し、翻刻の末尾に一括して図版を掲載した。該当箇所の表示については、異版は**太字**、三都版は通常の太さで示した。

一、異版に三都版との異同がある場合は、原則として句点の有無や用字に関するものを除き、傍線を付し、適宜、脚注に注記した。ただし、大きな特徴が認められる場合には用字に関しても指摘した箇所がある。

一、三都版の本文に該当する部分の本文が異版にない場合には、該当箇所の三都版の本文を〔〕に入れて示した。

一、本稿において、異版との対照に用いた『日本永代蔵』三都版は『新編西鶴全集』第三巻（新編西鶴全集編集委員会編、勉誠出版、二〇〇三年刊）所収の影印本を底本として使用し、同書掲載の杉本好伸氏による翻刻を適宜参照したが、句点や踊り字、字形などの表記は底本通りに改めた。

一、三都版の挿絵については、『新編西鶴全集』第三巻が底本として用いている『近世文学資料類従　西鶴編9　日本永代蔵』（近世文学書誌研究会編、吉田幸一解説、勉誠社、一九七六年刊）の影印を掲載した。

【翻刻】

日本永代蔵　一

目録

初午は乗て来る仕合

江戸にかくれなき俄分限

泉州水間寺利生[4]の銭

昔は掛算今は当座銀

江戸にかくれなき出見世

壱寸四方も商売の種[5]（〇オ）

仕合の種を蒔銭

江戸にかくれなき千牧分銅

そなはりし人の身の程

才覚を笠に着大黒
江戸にかくれなき小倉持
身過の道急ぐ犬の黒焼　（三都版　巻二の三）

煎じゃう常とはかはる問薬
江戸にかくれなき箸削
小松さかへて材木屋　（〇ウ）

（三都版　目録対応箇所）

初午は乗て来る仕合
江戸にかくれなき俄分限
泉州水間寺利生の銭　（三都版　巻一の一）

昔は掛算今は当座銀
江戸にかくれなき出見世
壱寸四方も商売の種　（三都版　巻一の四）

仕合の種を蒔銭
江戸にかくれなき千牧分銅
そなはりし人の身の程　（三都版　巻四の三）

才覚を笠に着大黒
江戸にかくれなき小倉持
身過の道急ぐ犬の黒焼　（三都版　巻二の三）

煎じゃう常とはかはる問薬
江戸にかくれなき箸削
小松さかへて材木屋　（三都版　巻三の一）

①

はつむまはのつてくる仕合

初午は乗てくる仕合

②天道ものいわずしてこくどにめくみふかし。人はじつあつて
天道言ずして国土に恵みふかし。人は実あつて

③いつはりおほし。其心[6]はもときよにして物におうじてあとなし。是
偽りおほし。其心ンは本虚にして物に応じて跡なし。是

④善あくの中にたつてすぐなる今の御[7]代をゆたかにわたるは人の
善悪の中に立てすぐなる今の御ンヨ代を。ゆたかにわたるは人の

⑤人たるがゆへにつねの人にはあらず一生一大事身をすぐるのわざ
人たるがゆへに常の人にはあらず。一生一大事身を過るの業

⑥しのうこうしやうの外しゆつけしんしよくにかぎらず。しまつ大明
士農工商の外出家神職にかぎらず。始末大明

⑦神の御たくせんにまかせ金銀をたむべし。是二親の外に命の
神の御詫宣にまかせ金銀を溜べし。是二親の外に命の

⑧おやなり。人間ながくみれはあしたをしらずみぢかく思へは夕におどろく。
　親なり。人間長くみれば朝をしらず短くおもへば夕におどろく。
⑨されは天地は万物のげきりよ。くはうゐんは百代のくわがくふぜいはゆめ
　されば天地は万物の逆旅。光陰は百代の過客浮世は夢
⑩まほろしといふ。時のまのけふりしすれは何ぞ。金銀くはせきにはおとれり
　幻といふ。時の間の煙死すれば何ぞ金銀瓦石にはおとれり。
⑪くはうせんの用には立がたし。然りといへども残して子孫のためとはなりぬ。
　黄泉の用には立がたし。然りといへども残して子孫のためとはなりぬ。
⑫ひそかに思ふによに有程のねがひ何によらずきんどくにてかなはざる事
　ひそかに思ふに世に有（二オ）程の願ひ何によらず銀徳にて叶はざる事
⑬あめが下に五つ有。それより外はなかりき。是にましたるたから舟の有べき
　天が下に五つ有。それより外はなかりき。是にましたる宝船の有べき
⑭や。見ぬ嶋のをにのもちしかくれかさかくれみのもにはか雨のやくには[8]たゝ
　や。見ぬ嶋の鬼の持し隠れ笠かくれ蓑も暴雨の役に立
⑮ねは。てどをきねがひをすてゝちか道にそれ〳〵のかしよくをはけむべし。（〇一オ）
　ねば。手遠きねがひを捨て近道にそれ〳〵の家職をはげむべし。
①ふくとくは其身のけんごに有。てうせきゆだんする事なかれ。ことさら世の
　福徳は其身の堅固に有。朝夕油断する事なかれ。殊更世の
②仁義をもとゝして神仏をまつるへし。是わこくのふうぞくなり。折ふしは
　仁義を本として神仏をまつるべし。是和国の風俗なり。折ふしは
③春の山二月はつむまの日。せんしうにたゝせ給ふみづまでらのくはんをん
　春の山二月初午の日。泉州に立せ給ふ水間寺の観音
④にきせん男女まうてける。皆しん〳〵にはあらずよくのみちづれはるかなる
　に貴賤男女参詣ける。皆信心にはあらず。欲の道づれはるかなる
⑤こけぢひめはきおぎのやけはらをふみわけ。いまだ花もなきかたざとに
　苔路姫萩荻の焼原を踏分。いまだ花もなき片里に
⑥来て此仏にきせいかけしは其ぶんざい程にとめるをねがへり。此御本尊のみ
　来て此仏に祈誓かけしは。其分際程に富るを願へり。此御本尊の身
⑦にしても。ひとり〳〵にへんごんし給ふもつきず。今此しやばにつかみどりはなし

にしても。独り〳〵に返言し給ふもつきず。今此娑婆に掴どりはなし。

⑧我頼むまでもなく。とみんは汝にそなはるおつとはたうちてふはは たおり

我頼むまでもなく。土民は汝に（二ウ）そなはる夫は田捶て婦は機織

⑨ててうぼ其いとなみすべし。一切の人此ことく9戸帳ごしにあらたなる御つげな

て朝暮其いとなみすべし。一切の人此ことくと戸帳ごしにあらたなる御告な

⑩れ共。しよ人のみゝに入ざる事のあさまし。それ世の中に借銀の利足ほど

れ共。諸人の耳に入ざる事の浅まし。それ世の中に借銀の利足程

⑪おそろしき物はなし。此みてらにて万人かりぜにする事有。当年壱銭預りて

おそろしき物はなし。此御寺にて万人かり銭する事あり。当年壱銭あづかりて

⑫来年弐銭にして返し。百文請取弐百文にて相済しぬ是観音のせにな

来年弐銭にして返し。百文請取弐百文にて相済しぬ。是観音の銭な

⑬ればいづれもしつついなくへんなうし奉る。おの〳〵五せん三銭十せんより内を

ればいづれも失墜なく返納したてまつる。をの〳〵五銭三銭十銭より内を

⑭かりけるに。爰に年の比廿三四の男むまれ付ふとくたくましく。ふうそくりつ

かりけるに。爰に年のころ廿三四の男産付ふとくたくましく。風俗律

⑮ぎにあたまつき跡あがりに。のぶながじだいのしたてぎる物そで下せはしくす（〇一ウ）

義にあたまつき跡あがりに。信長時代の仕立着物袖下せはしく裙

①そまはりみぢかく。うへした共につむぎのふとりをむもんの花色そめにして。同じ

まはり短く。うへした共に紬のふとりを無紋の花色染にして。同じ

②切のはんゑりをかけて。上田じまのはをりにもめんうらをつけて。中わきざしに

切の半襟をかけて。上田嶋の羽織に綿うらをつけて。中脇指に

③つかぶくろをはめて。世けんかまはずしりからげして爰に参りし。しるしの山つば

柄袋をはめて。世間かまはず尻からげして。爰（三オ）に参りし印の山椿

④きのゑだにところ入しひげこ取そへて下向とみへしか。御ほうぜんに立よりて

の枝に野老入し髭籠取そへて下向と見えしが。御宝前に立寄て

⑤借銭壱貫と云けるに。寺やくのはうし貫ざしなから相渡して其くに其なを

借銭壱貫と云けるに。寺役の法師貫ざしながら相渡して其国其名を

⑥尋ねもやらず。かの男行がたしれずなりにき。寺僧あつまりて当山かいひやく
　たづねもやらず。彼男行がたしれずなりにき。寺僧あつまりて当山開闢
⑦より此かた。つゐに壱貫のぜにかしたるためしなし。かる人是かはじめ也。此銭すむへき事
　より此かた。終に壱貫の銭かしたる例なし。借人是がはじめなり。此銭済べき事
⑧共思はれすじこんは大ぶんにかす事無用とさたし侍る。其人のすみし[10]所はむさ
　共思はれず自今は大分にかす事無用とさたし侍る。其人の住所は武蔵
⑨し江戸にして小あみ町のすゑに。浦人のつきし舟どひやして次第に家さか
　江戸にして小網町のすゑに。浦人の着し舟問屋して次第に家栄
⑩ゑしを悦ひて。かけすゞりに仕合まると書付みづま寺の銭を入置。れうしの
　へしをよろこびて。掛硯に仕合丸と書付水間寺の銭を入置。猟師の
⑪出舟にしさいを語りて百文づゝ借けるに。かりし人しぜんのさいわゐ有けると
　出船に子細を語りて百文づゝかしけるに。かりし人自然の福有けると
⑫ゑんほに聞伝へて。せんぐりに毎年あつまりて一年一ばいのさん用につもり
　遠浦に聞伝へて。せんぐりに毎年集り[11]て一年一倍の算用につもり
⑬十三年めになりてもと壱貫のぜに八千百九拾弐貫にかざみとうかいだう
　十三年目になりて元壱貫のぜに（三ウ）八千百九拾弐貫にかさみ。東海道
⑭をとをし馬に付をくり。て御寺につみかさねけれは。僧中よこ手を[12]打てそのゝち
　を通し馬につけ送りて御寺につみかさねければ。僧中横手打てそのゝち
⑮せんぎあつて。すゑの世のかたりくになすべしと都よりあまたのばんじやう（〇二オ）

挿絵第一図（〇二ウ）

挿絵第二図（〇三オ）

　せんぎあつて。すゑの世のかたり句になすべしと都よりあまたの番匠
①をまねきて。ほうだうをこんりう有がたき御利生なり。此商人うちぐらには
　をまねきて。宝塔を建立有難き御利生なり。此商人内蔵には
②じやうとうのひかり。其なはあみやとてむさしにかくれなし。惣じておやの
　常灯のひかり。其名は網屋とて武蔵にかくれなし。惣じて親の

③ゆつりをうけず其身さいかくにしてかせぎ出し。銀五百貫目よりして是
　ゆづりをうけず其身才覚にしてかせぎ出し。銀五百貫目よりして是
④をぶんげんといへり千貫目のうへを長者とは云なり。此銀のいきよ
り[13]いく千万
　を分限といへり。千貫目のうへを長者とは云なり。此銀の息より
は幾千万
⑤歳楽と祝へり
　歳楽と祝へり（四オ）
　挿絵第九図（四ウ）
　挿絵第十図（五オ）
⑤　**昔は掛算今は当座銀**[14]
　昔は掛算今は当座銀
⑥古代にかはつて人のふうぞく次第おごりになつて。しよし[15]其分ざ
いよりは
　古代にかはつて人の風俗次第奢になつて。諸事其分際よりは
⑦くはれいをこのみ殊にさいしのいふく。また。うへもなき事共身の
程しらず。みやうが
　花麗を好み殊に妻子の衣服。また上もなき事共身の程しらず。冥加
⑧おそろしきかうけき人の御ゐさへ。京をりはぶたへの外はなかりき。
殊更くろき物に
　をそろしき高家貴人の御衣さへ。京織羽二重の外はなかりき。殊さ
ら黒き物に
⑨さだまつての五所もん大みやうよりすゑ〳〵の万人に此にあはざる
といふ事なし。近
　定まつての五所紋。大名よりすゑ〳〵の万人に此似合ざると云事な
し。近
⑩年小ざかしき都人のしだし。なん女のいるいしな〴〵のびをつくし。
ひながたに色をうつし
　年小ざかしき都人の仕出し。男女の衣類品々の美をつくし。雛形に
色をうつし
⑪うきよ小もんのもやう。御所の百色ぞめときすてのあらひがのこ。
物ずきかくべつ世
　浮世小紋の模様。御所の百色染解捨の洗鹿子。物好各別世
⑫かいにいたりせんさく。女の身持むすめのゑんぐみよりないしやう
うすく成て。かけうのさは
　界にいたりせんさく。女の身持娘の縁組より内証うすくなりて。家
業の障
⑬りとなる人かずしらずゐんしの平せいきよらを見するはとせいのた
め也。万民のびふ
　となる人数しらず。嬪姒の平生きよらを見するは渡世のためなり。
万民の美婦
⑭ははるの花見秋のもみぢ見。こんれいふるまひの外は。めたついし
やうをきかさねず共
　は春の花見秋の紅葉見。婚礼振舞の外は。目立衣装を着重ず共
⑮すむ事□[也]。有時室町のかたわきにしたて物屋の軒かほりて。たちは

なのののうれん（〇三ウ）
すむ事（十三ウ）なり。有時室町のかた脇に仕立物屋の軒かほりて。
橘の暖簾
①掛りて。当世きる物のぬい出しすぐれて都の手きゝ有て。きぬわた
爰に持つど
掛りて。当世着物の縫出しすぐれて都の手利ありて。絹綿爰に持つ
と
②ひてさながらきぬかけ山を我やどに見し事そかし。仕付のいとひの
しあつるを待
ひてさながら衣掛山を我宿に見し事ぞかし。仕付の糸火熨あつるを
待
③かねしほとゝぎす。はつ空う月一日は衣かへとて色よきあはせをぬ
ひかけしを見
兼しほとゝぎす。初空卯月一日は衣かへとて色よき袷を縫かけしを
み
④るに。白きもんらのひつかへしに。ひぢりめんを中に入て三牧かさ
ねの袷。両袖ゑり
るに。白き紋羅のひつかへしに。緋縮綿を中に入て三牧かさねの袷。
両袖襟
⑤に引わたむかしはなかりき事なり。此じせつのいしやうはつとしよ
こく諸人の身のため。
に引綿むかしはなかりし事なり。〔此うへは万の唐織を常住着とな
すべし。〕此時節の衣装法度諸国諸人の身のため。
⑥今思ひあたりて有がたく覚へぬ。商人のよききぬきたるも見ぐるし。
つむぎはをの
今思ひあたりて有がたくおぼえぬ。商人のよき絹きたるも見ぐるし。
紬はおの
⑦れにそなはりてみよげ也。ふしはきらを本としてつとむる身なれは。
たとへむぼくの
れにそなはりて見よげなり。武士は綺羅を本としてつとむる身なれ
ば。たとへ無僕の
⑧さふらひ迄も。ふうきつねにしても[16]おもはしからず。近代江戸し
つかにして松はかはらず
さふらひまでも。風義常にしておもはしからず。近代江戸静にして
松はかはらず
⑨ときわばし。本町ごふくしよ京の出みせもん付かゞみにあらはした
なもり手代それ
常盤ばし（十四オ）本町呉服所京の出見世紋付鑑にあらはし。棚も
り手代それ
⑩〳〵のとくいの御やしきへ出入ともかせぎにはげみあひ。商売にゆ
だんなくべんぜつ
〳〵に得意の御屋敷出入ともかせぎに励あひ。商売に油断なく弁舌
⑪てだれちゑ才覚。算用たけてわるがねをつかまず。利とくにいきう
しの目をも
手だれ智恵才覚。算用たけてわる銀をつかまず。利徳に生牛の目を
も

⑫くじり。とらの御門のよをこめ。千里にゆくも奉公。あしたにはほしをかづきはかり
　くじり。虎の御門の夜をこめ。千里にゆくも奉公。朝には星をかづき秤

⑬ざほに心玉をなして。明暮御きげんとれ共。いぜんとちがひ今はんしやうのむさしの
　竿に心玉をなして。明暮御機嫌とれ共。以前とちがひ今はん昌の武蔵野

⑭なれ共。すみからすみ迄手入して。さらにつかみ取もなかりき御しうげんまたはきぬ
　なれ共。隅から角まで手入して。更に掴取もなかりき。御祝言又は衣

⑮[17]ばり の折からは其やく人小なんどかたのよしみにて一商して取けるに今時はしよ方の（〇四オ）
　配の折からは其役人小納戸かたの好みにて一商して取けるに。今時は諸方の

①入札すこしの利じゆんを見かけてくらひつめになりて。内しやうかなしくくはいぶん斗
　入札すこしの利潤を見掛て喰ひ詰になりて。内証かなしく外聞斗

②の御用にとゝのへ。あまつさへ大ぶんのうりかゞりす年不埒に成て。京銀のりまはし
　の御用等調へ。剰へ大分の売かゝり数年不埒になりて。京銀の利まはし

③にもあはず。かはし銀につまりてなんぎにはかに取ひろげたる棚もしまひがたくをの
　にもあはす。かはし銀につまりて。難義俄に取ひろげたる棚も仕舞（十四ウ）かたく自

④づから小前になりぬ。とかくはあはぬ算用江戸だな残つて何百貫目のそん。あしもと
　小前になりぬ。兎角はあはぬ算用江戸棚残て何百貫目の損。足もと

⑤のあかい内に本もみの色も[18]かへてと。めい〳〵ふんべつする時。又。商の道は有物。三井九郎
　のあかいうちに本紅の色かへてと。銘々分別する時。又商の道は有物。三井九郎

⑥右衛門といふ男手がねのひかり昔小判のするが町といふ所に。おもて九けんに四十けん
　右衛門といふ男手金の光むかし小判の駿河町と云所に。面九間に四十間

⑦にむねたかくながや作りして。新だなを出し。万[19]げん銀うりにかけねなしと相さた[20]め。四
　に棟高く長屋作りして。新棚を出し。万現銀売にかけねなしと相定め。四

⑧十よ人りはつ手代をおひまはし。一人一色のやくめ。たとへはきんらんるい一人ひのぐんない
　十余人利発手代を追まはし。一人一色の役目。たとへば金襴類一人。日野郡内

⑨きぬ類一人はぶたへ一人さや類一人。もみ類一人あさばかま類一人けおり類一人。此ことく手わけをし
絹類壱人。羽二重一人沙綾類一人。紅類一人麻袴類一人毛織類一人。此ごとく手わけをし
⑩てびらうと一寸四方。どんすけぬきぶくろになる程。ひじゆすやりしるし長。りうもん
て天鳶兎一寸四方。段子毛貫袋になる程。緋繻子鑓印長。龍門
⑪の袖ぶくりんかた〳〵にても物のじゆうにうり渡しぬ[21]殊更にはかめみへのひしめ急
の袖覆輪かた〳〵にても物の自由に売渡しぬ。殊更俄か目見の熨斗目いそぎ
⑫のはをりなどは其使をまたせ数十人[22]の手前さいく人立ならび。そくざにしたて是を渡
の羽織などは其使をまたせ数十人の手前細工人立ならび。即座に仕立これを（十五オ）渡
⑬しぬ。さによつて家さかへ毎日金子百五十両づゝならしにしやうばいしけると也世の
しぬ。さによって家栄へ毎日金子百五十両づゝならしに商売しけるとなり。世の
⑭てうほう是ぞかし。此ていしゆを見るに。めはなてあしあつて外の人にかはつた
重宝是ぞかし。此亭主を見るに。目鼻手足あつて外の人にかはつた
⑮所もなく家しよくにかはつてかしこし。大商人の手本なるべし。いろは付の引出し（〇四ウ）

挿絵第三図（〇五オ）

所もなく家職にかはつてかしこし。大商人の手本なるべしいろは付の引出し
①に。から国わてうのけんふをたゝみこみしな〳〵の時代きぬ。中将姫の手おりのか屋
に。唐国和朝の絹布をたゝみこみ品々の時代絹。中将姫の手織の蚊屋
②人丸のあかしちゞみあみだのよたれかけあさひながまいづるの切。たるま大しの
人丸の明石縮阿弥陀の涎かけ朝比奈が舞鶴の切。達磨大師の
③しきぶとんりんはせいがくゝりづきん三条小かぢか刀袋何によらずないと云物なし
敷蒲団林和靖か括頭巾三条小鍛冶が刀袋何によらずないといふ物なし
④万有帳めでたし[23]
万有帳めでたし（十五ウ）
挿絵第十一図（十六オ）

④　仕合のたねをまきせん[24]

仕合の種を蒔銭
⑤人は正直を本とする事是神国のならはせなり。いせのやしろのかろ〳〵しく
人は正直を本とする事是神国のならはせなり。伊勢の社のかろ〳〵

敷

⑥百廿まつしやかみひやうぐのしんたい思へはあさまなる事なれ共。何のいつわり

百二十末社紙表具の神体思へば浅猿なる事なれ共。何の偽り

⑦なき心をかゞみにかけて人もくもらずしゆしやうに有がたく此あきつすにすむ

なき心を鏡に懸て人も曇らず殊勝に有がたく此秋津洲に住

⑧ものあゆみをはこびぬ。されはいづれの世より小才覚らしく宮めぐりのまきせんに

者歩をはこびぬ。さればいづれの世より小才覚らしく宮廻り[25]の蒔銭に

⑨はとのめといふおかしげ成なまり銭百といふて六十つなぎにして扨もせちがし

鳩の目と云おかしげなる鉛銭百といふて六十つなぎにして扨もせちがし

⑩こき人心ゆたかなるふくの神是をわらひ給ふべし。爰のはんじやう申もおろか也。大々

こき人心豊なる福の神是を笑ひ給ふべし。爰の繁昌申もおろかなり。大々

⑪かぐらのたからの山しよぐはんぜうじゆ。十弐貫目此おはつをのたゆるまもなく。しやう

神楽の宝の山諸願成就十弐貫目此御初尾の絶る間もなく。笙

⑫のふえかいじやくししてよ渡るうみのわかめにまさごの数をしらず其外すへ〳〵をし

の笛貝杓子して世渡る海の若和布に真砂の数をしらず其外末々御師

⑬手前ゆうひつのなき人はしよこくたんなまはりのお定りの状ひとつ銭一文つゝに

手前右筆のなき人は諸国檀那まはりのお定りの状ひとつ銭壱文つゝに

⑭して是をかいてねん中さいしはごくむ人何百人か其かぎりしられず。口過様々

して是を書て年中妻子はごくむ人何（九ウ）百人か其かぎりしられず。口過さま〳〵

⑮に有所ぞかし。人の気をくみて商の上手は此国也。あひの山の袖ごい迄も心なが（〇五ウ）

に有所ぞかし人の気をくみて商の上手は此国なり相の山の袖乞迄も心なが

①くだうしやのきげんを取てうへすさむからす。身にけんふをかざり。つれ引のさみせん

く道者の機嫌をとりてうへず寒からす。身に絹布をかざり連引の三味線

②にのせてあさましや心ひとつといふ一ふしいつ聞ても替らず。此一里の内殊更にな

に乗て浅ましや心ひとつといふ一節いつ聞ても替らず。此一里の間殊更に慰

③ぐさみにもなれり。世に銭程おもしろき物はなし。あまたのかう参りはあれども
にもなれり。世に銭程面白き物はなし。あまたの講参りはあれ共
④つゐに此こつじきのたんのする程銭とらせし人なかりき。思へはわづかの事なるによろ
終に此乞食のたんのする程銭とらせし人なかりき。思へは纔の事なるによろ
⑤こばせたき物なり。嶋原正月かいのにはせんはすれと京の人すぐれてしばしとお白
こばせたき物なり。嶋原正月買の庭銭はすれと京の人すぐれてしはしとお白
⑥石まくをやじもいへり。有時江戸の町人さんぐうせしにのりかけさのみかさらず。
石まく親仁もいへり。有時江戸の町人参宮せしに乗掛さのみかさらず。
⑦かこふとんもむらさきのめに立ずして供二三人召つれ。太夫殿のあん内しやにま
駕籠ぶとんも紫の目に立ずして供二三人召つれ。太夫殿の案内者に任
⑧かせ山田を出し時新銭弐百貫とゝのへからしり馬に付てあひの山五十町のうち
せ山田を出し時新銭弐百貫調へから尻馬に付て間の山五十町のうち
⑨まきちらしけれは。大道はつちもみへずのも山もみな銭かけ松かと思はれ立かゝりて
蒔散（十オ）しけれは。大道は土も見へず野も山もみな銭掛松かと思はれ立かゝりて
⑩ひろへは松原おどりの袖にあまりみそこしよりこぼれてしばしは小うたばち
拾へは松原踊の袖にあまり味噌漉よりこぼれてしばしは小歌撥
⑪をとのなりをやめて。いか成長者に有やらんと其名を尋しにぶしうさかいてう
音の鳴をやめて。いかなる長者に有やらんと其名を尋しに。武州境町
⑫のほとりにふんどうやの何がしとて人のしらぬ銀持なりせけんにはから大名の見
の辺りに分銅屋の何某とて人のしらぬ銀持なり世間には唐大名の見
⑬せかけ商売おほし此人はおもてむきかるうしてないしやうのつよき事くらがりに
せかけ商売おほし此人は面むきかるうして内証のつよき事闇に
⑭おにをつなぐがごとく。年こしことに仕合かさなり廿一より五十五才迄卅四年に
鬼をつなぐがごとく。年越毎に仕合かさなり廿一より五十五才迄卅四年に
⑮我とかせぎ出し金七千両を一子にゆづりぬ。そも〳〵商のはじめは都伝内といふ（〇六オ）

我とかせぎ出し金七千両を一子にゆづりぬ。抑商のはじめは都伝内といふ

①しばゐのきん所に九尺まのたなかりて銭みせを出し諸けんぶつのふだせんをうりける

芝居の近所に九尺間の棚借て銭見せを出し諸見物の札銭を売ける

②に銀弐匁三匁の内にて五り[26]壱分のかけこみをみて少しの事ながらつもれは大分

に銀弐匁三匁のうちにて五厘壱分の掛込を見て少しの事ながらつもれば大分

③の利を取次第に両がへ屋となりて是楠ぶんげんねのゆるぐ事なし。其となりにすぐ

の利を取。次第に両替屋となりて是楠分限根のゆるぐ事なし其隣にすぐ

④れてりはつなる男有てからすをさぎの見せ物をこしらへ一とせはえんまてうとて

れて利（十ウ）発なる男ありて烏を鷺の見せ物を拵へ一年は閻魔鳥とて

⑤作り物めつ[27]らしき一日に五十貫づゝも取こみ又ある年は形のおかしげなるをへら坊

作り物珍ら敷一日に五十貫つゝも取込又ある年は。形のおかしげなるを便乱坊

⑥と名付。毎日ぜにの山をなしてしぜんに家くらもとむべき人はさもなく。今におく山入

と名付。毎日銭の山をなして俄に家蔵求へき人はさもなく。今に奥山入

⑦うみに心をなししぜんあさき色なるさるもがな。もしも手あしの付たるたいも有事か

海に心をなし自然浅黄色なる猿もがな。もしも手足の付たる鯛の有事も

⑧と水のあわの世渡りきゆる事やすし。惣じて役者子共の取かねは当座のあだ

と水の泡の世わたり消る事安し。惣じて役者子共の取銀は当座の化

⑨ばなぞかし玉川千之丞女がたしてかはちがよひの狂言一番を一日小判壱両にさだめ

花ぞかし玉川千之丞女がたして河内通ひの狂言一番を一日小判壱両に定め

⑩一年三百六拾両づゝ取ぬるも伊せへ引こみしぬる時は昔のぶたいゐしやうも残らず

一年三百六十両づゝ取ぬるも伊勢へ引込死る時は昔の舞台衣装も残らず。

⑪其時のゑいぐはをたのしめる外なし。金銀ためてあき人になるへき心がけしるにも

其時の栄花を楽しめる外なし。金銀溜て商人になるべき心掛しるにも

⑫あらず。其道々をしる事人のかんしん也過にしとりの年諸だうぐ迄もけふりとなし

あらず。其道々をしる事人の肝心なり。過にし酉の年諸道具迄も煙となし

⑬皆々丸はだかに成しが程なくいぜんのごとく酒屋はすぎをしるしの門はかはらず。本町

皆々丸裸になりしが程なく以前のごとく酒屋は杉をしるしの門はかはらず。本町

⑭のごふくだなそれ〳〵のにしきをかさり伝馬町のきぬ屋わたやも同じたなつき

の（十一オ）

挿絵第十二図（十一ウ）

挿絵第十三図（十二オ）

呉服棚それ〳〵の錦を飾り伝馬町の絹屋綿屋も同じ棚つき

⑮さくまのおもてはよろづの紙うり。ふな町のうを市こめかしのうりかいあまだなのぬり（〇六ウ）

佐久間の面は万の紙売。舟町の魚市米柯桟の売買尼棚の塗

①物どいやとをり町のはんじやう此御時なるべし風たへてくもしづかにふれてれ町はげた

物問屋通り町の繁昌此御時なるへし風絶て雲静に降照町は下踏

②せつたのさいく人白かね町のつちのおと昔見し人其かしよくかはらず。此前日用取は

雪踏の細工人白銀町の槌の音昔見し人其家職かはらず。此前日用取は

③其すがた山ふ[28]しは其かほしゆもつ切きずのかうやくうりは今も同じこゑ。ひとりも

其姿山伏は其顔腫物切疵の膏薬売は今も同じ声。独りも

④身過をかへたるはみへず。ひんしやひんにて分限はぶんげんに成ける。是程ふしき成事なし

身過をかへたるは見えず。貧者ひんにて分限は分限に成ける。是程ふしぎなる事なし

⑤とかのふんどうや見めぐりおきて語りぬ。ひろき町すじに只壱人其じぶんかねひろ

と彼分銅屋見廻り置て語りぬ。広き町筋に只壱人其時分銀拾

⑥ひてやてなれししゆずやをやめて中ばしにかたなわきざしのたなを[29]出して一たびは

ひてや手馴し珠数屋をやめて中橋に刀脇指の棚出して一度は

⑦さかへてみへしが程なく今のつるぎ昔のながたなとさびて又もとのじゆずや

栄て見えしか程なく今の剣昔の菜刀とさびて又もとの珠数屋

⑧を後生大しとして命のたまをつながれ人はしつけたる道を一すじに覚へてよしとそ

を後生大事として命の珠をつながれ人はしつけたる道を一筋に覚てよしとそ（十二ウ）

⑨ **才覚をかさにきる大黒**

才覚を笠に着る大黒

⑩一にたはら二かいつくり三がいぐらを見わたせば。都に大こく屋といへるぶんげんしやあり

一に俵二階造り三階蔵を見わたせは。都に大黒屋といへる分限者有
⑪けるふうきに世をわたる事をいのり五条のはし切石にかけかはる時西づめより三牧
　ける。冨貴に世をわたる事を祈り五条の橋切石に掛かはる時西づめより三牧
⑫めの板をもとめ是を大黒にきざませしんぐ〳〵に徳有次第にさかへ。家名を
　目の板をもとめ。是を大黒に刻ませ信心に徳あり次第に栄へ。家名を
⑬大黒屋新兵衛としらぬ人はなかりき。なんし三人ぶじにそだていづれもかしこく
　大黒屋新兵衛としらぬ人はなかりき。男子三人無事に撫育いづれもかしこく。
⑭おやじ悦びらうごのたのしみをきはめ。追付ゐんきよ[30]のしたくをせしに。そう領
　親仁よろこひ老後の楽を極め追つけ隠居の支度をせしに。惣領
⑮の新六にはかに金銀をつゐやし算用なしの色あそび。半年立ぬに百七十貫（〇七オ）

挿絵第四図（〇七ウ）

挿絵第五図（〇八オ）

の新六俄に金銀を費し算用なしの色あそび。半年立ぬに百七拾貫
①目入帳のうちみへざりしにとても埒の明ぬ｜せんぎなれは手代ひとつに心をあはせ
　目入帳の内見へざりしに。迚も埒の明さる｜僉儀なれば手代ひとつに心をあはせ。
②買置の有物にかんぢやう仕立七月前をやう〳〵に済し。向後おごりをやめ給へとゐ
　買置の有物に勘定仕立七月前を漸々に済し。向後奢を止たまへと異
③けんさまぐ〳〵申せしにさらに聞入ずして。其年のくれに又弐百三十貫目たらず
　見さま〳〵申せしに更に聞入ずして。其年の暮に又弐百三十貫目た（九ウ）らず
④今は内しやうにおがみへていなりの宮の前にしるべの人有て身をかくしぬ。りつ
　今は内証に尾が見えて稲荷の宮の前にしるへの人ありて身を隠しぬ。律
⑤きなるおやじふくりうせられしを色々わびてもきけんなをらす町しゆには
　義なる親仁腹立せられしを色々詫ても機嫌なをらず。町衆に袴
⑥かまきせてきうりを｜切て子をひとりすてける。されは親の身として是程まて
　きせて旧里をを｜[31]切て子をひとり捨ける。されば親の身として是程まて
⑦うとまるゝ事大方ならぬあく心也。新六ぜひもなき仕合はや当分のかりやにもゐら

うとまる、事大かたならぬ悪心なり。新六是非もなき仕合はや当分の借屋にも居ら

⑧れぬしゆびになりて。爰を立のきあづまの方へ行道のわらんぢ銭とてもなく。

れぬ首尾になりて。爰を立退東のかたへ行道の草鞋銭とてもなく。

⑨かなしさは我身ひとりとなげくにかひもなし。比は十二月廿八日のよすいふろに入し

かなしさは我身ひとりとなげくに甲斐もなし。比は十二月廿八日の夜水風呂に入し

⑩をそれおやじさまといふこゑおそろしく。ぬれ身にわた入ひとつかたにかけ。左に

を。それ親仁様といふ声おそろしく。湿身に綿入ひとつ肩にかけ。左に

⑪おびをさげてしたおびには気をつけずしてにけのび。けふたひ立にもしりからげ

帯を提て下帯には気をつけずして逃のび。けふ旅立にも尻からげ

⑫きのとく廿九日の空さためなく。たまりもやらぬ白雪の藤のもりの松にふりしこり

きのどく廿九日の空さだめなく。たまりもやらぬ白雪の藤の森の松にふりしこり

⑬て。すげがさなしのくびすぢに入相のかねもむねにひゞきて大かめだにくはんじゆし

て。菅笠（十オ）

挿絵第十四図（十ウ）

なしの首筋に入相の鐘も胸にひゞきて大亀谷勧修寺

⑭の茶屋のきれいにゆがまのたぎりをこのもしく。たへがたきさむさをしのぐものよと

の茶屋の奇麗に湯釜の沸をこのもしく。たへかたき寒さをしのぐ物よと

⑮思ひながら一せんもなけれはこしかけを見合せ。大津ふしみかこ[32]の立つゞき大ぜいの（〇八ウ）

思ひながら一銭もなければ腰かけを見あはせ大津伏見駕籠の立つゞき大勢の

①どさくさまぎれにのとのかはきをやめ。立さまに人のぬぎすてしてしまむしろをはづ

どさくさまぎれに咽のかはきを止。立さまに人の脱捨し豊嶋莚をはづ

②し。はじめてぬすみ心になつて行にをのといふさとにつきぬ。おちは[33]してこすへさひ[34]

し。はじめて盗心になつて行に小野と云里につきぬ。落葉して梢さび

③しきかきの木のかげにわらべともだちのあつまりて。をしやべんけいが死にけるとくや

しき柿の木の陰に童子友達の集りて。惜や弁慶が死けると悔

④むを聞は。ことういうしほど成くろいぬなるを立寄て是をもらひ。かのむしろにつゝみ

むを聞ば。特牛程なる黒犬なるを立寄て是を貰彼莚につゝみ

⑤おとは山のふもとに行て。のにくはつかふおとこをまねき。是はかんのめうやくに成犬也。

音羽山の麓に行て。野に鍬つかふ夫を招き。これは疳の妙薬になる犬なり。

⑥三とせあまりしゆ〳〵のくすりをあたへ今くろやきになすといへは。扨はしよ人のため

三年あまり種々の薬をあたへ今黒焼になすといへば。さては諸人の為

⑦ぞとあたりのしば。かれさゝをあつめ。ひうちぶくろを取出しけふりのたねとなし。里人

ぞとあたりの柴。枯笹をあつめ。火打袋を取出し煙の種となし

（十一オ）里人

⑧にもわづかにとらせ残るをかたに置て。山が[35]作りことばになりておほかみのくろやきはと

にも。わづかにとらせ残るを肩に置て。山家の作りことばになりて狼の黒焼はと

⑨こゑのおかしげにうりて行も帰るものせきこへてしるもしらぬもにつき付商ひ

声の可笑げに売て行も帰るもの関越てしるもしらぬもにつき付商ひ。

⑩ずいぶん道中の人になれたる心のはりやふで屋かたられておいわけより八丁迄に五百

随分道中の人になれたる心の針屋筆やかたられて追分より八丁までに五百

⑪八十が物しろなして。先は才覚男此取まはしが京にて出れはとをゐ江戸迄はゆかず

八十が物代なして。先は才覚男此取廻しが京にて出れば遠い江戸迄は行ず

⑫にすむ事をと心なからないつわらふつせたのながはしすゑにたのみをかけてくさつ

に済事をと。心ながら泣つ笑つ勢田の長橋すゑに頼みをかけて草津

⑬の人やどにて年を取うばがもちをむかしのかゞみ山にみなし。やがて心の花もさき

の人宿にて年を取。姥が餅をむかしの鏡山に見なし。頓て心の花も咲

⑭出るさくら山いろも香を[36]も有わかざかり。かせく[37]におい付びんばう神はあしよはき

出る桜山色も香も有若さかり。かせぐに追着貧乏神は足よはき

⑮おひそのもりのしめかざりもおのづからにはるめきて秋見る月もたのもしく。ふは（〇九オ）

老曽の森の注連飾もおのづからに春めきて秋見る月もたのもしく。不破

①のせきどのあけくれ。みのぢをはりを過てとうかいだうのざい〳〵めぐり都を出て六十二

の関戸の明暮。美濃路尾張を過て東海道の在々廻り都をいでゝ

六十二

②日めにしな川に着ぬ。是迄の口をすぎぜに弐貫三百のばし。売残せしくろやきを

日めに品川に着ぬ。是迄の口をすぎ銭弐貫三百（十一ウ）延し。売残せし黒焼を

③いそうつ[38]なみにしづめてそれより江戸入を急ぎしにくれてゆくあてと[39]もなければ。

磯浪に沈めてそれより江戸入を急ぎしに暮て行当所もなければ。

④たうかいじ門ぜんに一やを明しけるに。其かたかけにこもかふりてひにんあまたふしけるが。

東海寺門前に一夜を明しけるに。其かた陰に薦かふりて非人あまた臥けるが。

⑤はるもうらかせあらくなみ枕のさはがしく。めのあはぬよは迄身のうへの事共物語

春も浦風あらく浪枕のさはがしく。目のあはぬ夜半まで身の上の事共物がたり

⑥するを聞に。みなすじなきこつじき壱人はやまとのたつ田のさとのものすこしの

するを聞に。皆筋なき乞食壱人は大和の竜田の里の者。すこしの

⑦さけつくり。て六七人のよをらく〳〵とおくりしに。次第にたまりし金銀取あつめて

酒造りて六七人の世を楽々とおくりしに。次第にたまりし金銀取あつめて

⑧百両になる時。所の商まだるく。万事うちすて爰にくだるを。一門残らすしたし

百両になる時。所の商まだるく。万事うち捨爰にくだるを。一門残らずしたし

⑨きともの色々申てとめける。我無分別さかんにまかせごふく町のさかなだなかりて。

き友の色々申てとめける。我無分別さかんにまかせ。呉服町の肴棚かりて。

⑩上々吉諸白ののきならびには出しけれ共。かうの池いたみいけた[40]なんとねづよき大

上上吉諸白の軒ならびには出しけれ共。鴻の池伊丹池田南都根づよき大

⑪ぼくのすきのかほりに及びかたく。さかもとでを皆水になして。四斗たるのこもを

木の杉のかほりに及びがたく酒元手を皆水になして。四斗樽の薦を

⑫身にかぶりてふるさとのたつ田へもみぢのにしきはきず共せめてあたらしきもめ

身に被りて（十二オ）古郷の竜田へもみぢの錦は着ず共せめて新しき木綿

⑬ん□のこなれはかへるにと男なきして是に付てもしつけたる事をやめまじきもの

布子なればかへるにと男泣して是に付ても仕付たる事を止まじきもの

⑭ぞといふ程よろしからずよいちゑのてどきもはやおそし。又壱人はせんしうさかいの者
　ぞといふ程よろしからずよい智恵の出時もはやおそし。又壱人は泉州堺の者
⑮なりしがよろづにかしこ過てげいしまんして爰にくだりぬ。手は平の仲あんに（〇九ウ）

挿絵第六図（〇十オ）

　なりしが万にかしこ過て芸自慢してこゝにくだりぬ。手は平野仲庵に
①筆道をゆるされ。ちやのゆはかなもりそうわのなかれをくみしぶんはふかくさ[41]げんせい
　筆道をゆるされ。茶の湯は金森宗和の流れを汲詩文は深草の元政
②にまなびれんはいは西山宗ゐんのもんかと成。のうは小ばたけのあふぎをうけつゞみは
　に学び連俳は西山宗因の門下と成。能は小畠の扇を請鼓は
③しやう田与右衛門のてすじ。あしたにいとう源吉に道を聞夕へにあすか井殿の御まり
　生田与右衛門の手筋。朝に伊藤源吉に道を聞。ゆふべに飛鳥井殿の御鞠
④の色を見ひるはげんさいのこくわいにまじはり。よるは八はしけんけうに引ならひ一よ
　の色を見昼は玄斎の碁会にまじはり。夜は八橋検校に弾ならひ一節
⑤切は宗三にてしとなりていきづかひ。浄るりは宇治加太夫ぶしおとりはやまとや[42]甚
　切は宗三に弟子となりて息つかひ。浄るりは宇治嘉太夫節おどりは大和屋の甚
⑥兵衛に立ならひ。女御くるひはしまばらの太夫たかはしにもまれ。やらうあそひはすゞ
　兵衛に立ならび。女郎狂ひは嶋原の太夫高橋にもまれ（十二ウ）野郎遊びは鈴
⑦木平八をこなし。さはぎは両色里のたいこに本すいになされ。人間のする程の事其道
　木平八をこなし。噪ぎは両色里の太鼓に本透になされ。人間のする程の事其道
⑧のめいじんに尋ね覚へ何をしたれはとて人の中にはすむべきものをとうてだのみせし
　の名人に尋ね覚え何をしたればとて人の中には住べきものをと腕たのみせし
⑨か。かゝるいたりぜんさく当ふ[43]ん身過のようには立がたし。そろばんをおかすはかりめしらぬ
　が。かゝる到り穿鑿当分身業の用には立がたく。十露盤をおかず秤目しらぬ
⑩事をくやしかりぬ。ふしつとめはかつてをしらず。町人ほうかうもおろか也とておい出され。今此
　事を悔しかりぬ。武士つとめは勝手をしらず。町人奉公もおろかなりとて追出され。今此

⑪身になりて思ひあたりしよげいのかはりに身を過るたねをおしへおかれぬ親達を
身になりて思ひあたり諸芸のかはりに身を過る種をおしへをかれぬ親達を
⑫うらみける。今壱人はおやから江戸の地はへにて通り町に大屋しきを持て。一年に六百
うらみける。今壱人は親から江戸の地生にて通り町に大屋敷を持て。一年に六百
⑬両づゝ定てのたなちんを取ながら。しまつの二じをわきまへなく。其家までうりわたし
両づゝさだまつての棚賃を取ながら。始末の二字をわきまへなく。其家迄売はたし
⑭身のおき所なく心のもゆるくはたくを出て。くるま善七が中まはづれの物もらひと
身の置所なく心の燃る火宅を出て。車善七が中間はづれの物もらひと
⑮なりぬ。思ひ〳〵の身のうへ物語さりとては同じ思ひに哀ふかく。新六枕に立より我等（〇十ウ）
なりぬ。思ひ〳〵（十三オ）の身の上物語さりとては同じ思ひに哀ふかく。新六枕に立より我ら
①も京の者なるがきうりきられてお江戸を頼に下りけるがをの〳〵はなしを聞
も京の者なるが旧里断れてお江戸を頼に下りけるが。各咄しを聞
②に心ぼそしとはぢをつゝまず申せは三人共に口をそろへてわびことの手だては
に心ぼそしと恥をつゝまず申せば。三人共に口を揃て侘言の手便[44]は
③あらすやおはさまもないか何とぞ下り給はぬがよい物をといふはや跡へ帰らぬ昔
あらずや姨様もないか何とぞ下り給はぬがよい物をと云。はや跡へ帰らぬむかし
④今からさきのしあん也。扨めん〳〵のりはつにてかく浅ましく成給ふはふしきなり
今から先の思案なり。扨面々の利発にてかく浅ましく成給ふは不思儀なり。
⑤何事を見たて給ひても有べきといへは。いかな〳〵此ひろき御じやうかなれ共日本
何事を見立給ひても有べきといへば。いかな〳〵此広き御城下なれ共日本
⑥のかしこき人のよりあひせに三文あだにはもうけさせず。只銀がかねをためる世の
のかしこき人の寄会銭三文あだにはもうけさせず。只銀がかねをためる世の
⑦中といへり。ひさしく見及び給ふ内に商の仕出しはなきかと尋しに。されは大ふんに
中といへり。久敷見及び給ふ内に商の仕出しはなきかと尋しに。

されば大分に

⑧すたりゆくかいがらをひろいてれいがんしまにしていしばいをやくか。物こ[45]といそがは[46]しき

すたり行貝からを拾ひて霊岩嶋にして石灰を焼か物毎閙しき

⑨所なれはきさ[47]みこんぶはながつをかきてはかりうりか。つゝきめんをかふててぬぐい

所なれば刻毘布花鰹かきて計売か。つゞき櫛を買て手（十三ウ）拭

⑩の切うりか。か様の事ならではかるいしやうはい有まじといふにそちゑ付。よの明がたに

の切売か。か様の事ならではかるい商売有まじと云にぞ智恵付。よの明かたに

⑪立わかれけるが三人に三百のおきせんよろこぶ事かぎりなく。御仕合みへてふじ山ほどの

立別れけるが三人に三百の置銭悦事限りなく。御仕合みへて冨士山程の

⑫かね持に今の事ぞと申ける。それよりてんま町にふとものだなにしる人有て尋ゆき。

金持に今の事ぞと申ける。それより伝馬町の太物棚にしるべ有て尋行

⑬此たびのしさいをかたれは哀れをかけ男のはたらくべき所は爰なり。ひとかせぎと

此度の子細をかたれば哀れをかけ男の働べき所は爰なり。ひとかせぎと

⑭いふにそ力をゑて思ひ入のもめんをとゝのへ切うりのてぬぐひ。然も三月廿五日はじめ

云にぞ力をえて思ひ入の櫛を調へきり売の手拭。然も三月廿五日はじめ

⑮てしたやの天神に行ててうずばちのもとにてうり出しけるに。さんけいの人かふての（〇十一オ）

挿絵第七図（〇十一ウ）

挿絵第八図（〇十二オ）

て下谷の天神に行て手水鉢のもとにて売出しけるに。参詣の人買ての

①さいわいと一日に利を得て毎日是より仕出して十ケ年たゝぬ内に五千両のぶん

幸と一日に利を得て。毎日是より仕出して十ケ年立ぬ内に五千両の分

②げんにさゝれ。一人の才覚ものといわれ。新六がさしづをうけて所の人のたからとは成ける

限にさゝれ。一人の才覚者といはれ。新六か指図をうけて所の人の宝とは成ける。

③のうれんにすげがさきたる大黒をそめけれは。かさ大こくやといへり。八つやしき方に出

暖簾に菅笠きたる大黒を染ければ笠大黒屋といへり。八つ屋敷かたに出

④入九つ小ばんの買置十で丁どおさまりたるみよにすめる事のためし

入九つ小判の買置十で丁ど治りたる御代に住る事の目出たし
（十四オ）

⑤ **せんじやうつねとはかはるとひ薬**

煎じやう常とはかはる問薬

⑥四百四びやうは世にめいゐ有てげんきを得たる事かならずなり。人はちゑ才覚にも

四百四病は世に名医ありて験気をえたる事かならずなり。人は智恵才覚にも

⑦よらずひんびやうのくるしみ是をなをせるりやうぢの有やといゑうとくなる方

よらず貧病のくるしみ是をなをせる療治のありやと家有徳なるかた

⑧に尋ねけれは。今迄それをしらずようじやうさかりを四十のゐん迄。うか〳〵くらさ

に尋ねければ。今迄それをしらす養生さかりを四十の陰まで。うか〳〵暮さ

⑨れし事よ少し見たておそけれ共いまた[48]よい所あるはかわたびにせつたをじやう

れし事よ少し見立おそけれ共いまだよい所あるは革足袋に雪踏を常

⑩ぢうはかるゝ心からはふんげんにもなり給はん長者[49]といへるめうやくのはうを伝へ申べし

住帯るゝ心からは分限にもなり給はん長者丸といへる妙薬の方組伝へ申べし

⑪一[50]あさおき五両一かしよく弐十両一よづめ八両一しまつ拾両一たつしや七両此五十両をこ

△朝起五両△家職弐十両△夜詰八両△始末拾両△達者七両此五十両を細

⑫まかにしてむねさん用はかりめのちがひなきやうに手合ねんを入是をてうせき

にして胸算用秤目の違ひなきやうに手合念を入。是を朝夕

⑬のみこむからは長者にならざるといふ事なし。然れ共是に大じはとくたちあり。

呑込からは長者にならざるといふ事なし。然れ共是に大事は毒断あり

⑭[51]びしよくゐんらんきぬ物をふたんぎ・ないぎをのり物せんせい娘にことうたかるた○

○美食淫乱絹物を不断着○内義を乗物全盛娘に琴歌賀留多○

⑮むす子に万のうちはやし[52]まりやうきうかうく[53]はいれんはい・さ[54]しきぶしんちやのゆ（○十二ウ）

男（ニオ）子に万の打囃○鞠楊弓香会連俳○座敷普請茶の湯

①ずき。[55]諸事のあつかひ。うけはん。食酒たばこずき。心あてなしの京のぼり。八より

数奇〔○花見舟遊び日風呂入○夜歩行博奕碁双六○町人の居合兵法○物参詣後生心〕○諸事の扱請判〔○新田の訴詔事金山の中間入〕○食酒莨若好心当なしの京のぼり〔○勧進相撲の銀本奉加帳の肝入○家業の外の小細工金の放目貫○役者に見しられ揚屋に近付〕○八より

②高ひかり銀。まづ此通りを。はんめうひさう石よりおとろしく。口にていふも扨おき。心

高借銀先此通りを斑猫比霜石より怖敷口にていふも扨置心

③に思ふこともなかれと。ちいさき耳にさゝやき給へば。是皆金言と悦び。彼福者のをしへ

に思ふ事もなかれと少[56]き耳に小語給へば是皆金言と悦び彼福者の教へ

④にまかせ。朝暮ゆだんなく。気をつけ心をくだく中に。殿づくりしまひ帰る[57]大工やねふき

に任せ朝暮油断なく〔所は御江戸なれは何をしたればとて商の相手はあり。珍敷見立もがなと日本橋の南詰に曙より一日立つくしけるに流石諸国の人の集り。山も更にうこくかことく京の祇園会大坂の天満祭にかはらず。毎日の繁昌此御時君が代の道広く（二ウ）通り町十二間の大道所せきなく此橋の上に馬乗一人出家壱人鎧壱筋朝から晩迄絶る事なく。され共人の大事にかくる物はおとさず銭を壱文いかな〳〵目に角立ても拾ひがたし。是を思ふに佩につかふべき物にはあらず。兎角商売に一精出し見んと心は働きながら手振てかゝる事は今の世の中に取手の師匠か取揚婆々より外に銀に成物なし種蒔ずして小判も壱歩もはへる例なし何とぞ只取事をと〕気を付心を砕中に〔屋形〳〵に行て〕殿作り仕舞大工屋根葺〔おのがひとつれに〕

⑤二[58]三百人。あとよりばんじやうわらはに。かんな[59]こつはをかづかせける[60]。あたら檜の木のきれ〴〵落

弐百三百人〔辰巳あがりなる高咄し逆鬢にして天窓つきおかしく衣裏の汚着物袖口のきれたる羽織のうへに帯して間棹杖に突も有。大かたは懐手腰の屈みし後付其職人とは看板なしにしれける。〕跡より番匠童に鉋木屑をかづかせけるに可惜（三オ）

挿絵十五図（三ウ）

挿絵十六図（四オ）

檜の木の切々をち

⑥てすたるを。ひとつ〳〵ひろい行に。神田[61]すぢかいはし迄に。一荷にあまるを。弐百五十文にうり[62]

て捨るを〔かまはず。是らまで大様なる事天下の御城下なればこそと思はれ。是に気を付て〕ひとつ〳〵拾ひ行に。〔駿河町の辻より〕神田の筋違橋迄に一荷にあまる〔程取集め其まゝ是を売けるに〕弐百五十文〔手取して足もとにかゝる事を今迄しらぬ事の残念と其後は日毎に暮を急ぎ大工衆の帰りを見合其道筋に有程拾ひけるに五荷よりすくなき事なし。〕

⑦雨のふる日は。此木くずを箸にけづり青物屋におろし。此木きれ大木になり。手代

雨の降日は此木屑より箸を削〔て。須田町瀬戸物町の〕青物屋におろし〔売。箸屋甚兵衛と鎌倉柯桟にかくれなく次第分限となりて。後は〕此木切大木となり〔て材木町に大屋敷を求め〕。手代

⑧ばかりを三十余人かゝへ。十万両の内しやう銀。今は七十余才なればの。ひだつむき[63]に芝肴

ばかりを三十余人抱へ〔河村柏木伏見屋にも劣まじき木山をうけ。心の海広く身体真艫の風帆柱の買置に。願ひのまゝなる利を得て幾

程なく四十年のうち（四ウ）に。〔拾万両の内証金〕〔是ぞ若い時呑込し長者丸の験なり。〕今は七十余歳なれば〔すこしの不養生もくるしからじとはじめて上下共に〕飛騨紬に〔着替。〕芝肴

⑨もそれ〳〵にくい覚へ。老のいりまへかしこく取置き。八十八の時升かきをきらせ。此人しに

もそれ〳〵に喰覚へ〔筑地の門跡に日参して。下向に木引町の芝居を見物夜は碁友達をあつめ。雪のうちには壺の口を切水仙の初咲なげ入花のしほらしき事共。いつならひ初られしも見えざりしが銀さへあれば何事もなる事ぞかし。此人前後にかはらず一生悋くは。冨士を白銀にして持たればとて武蔵の、土羽芝の煙となる身を知て〕老の入前かしこく取置。〔世に有程のたのしみ暮し〕八十八の時。〔聞伝へ〕升掻をきらせ〔子共の名付親に頼。人のもちひ世のさたに飽て〕此人死

⑩びかり。万人是をうらやむ。□き時たくはへ置て。年寄りてのほどこしかんよう[64]。とても先へは持てゆか

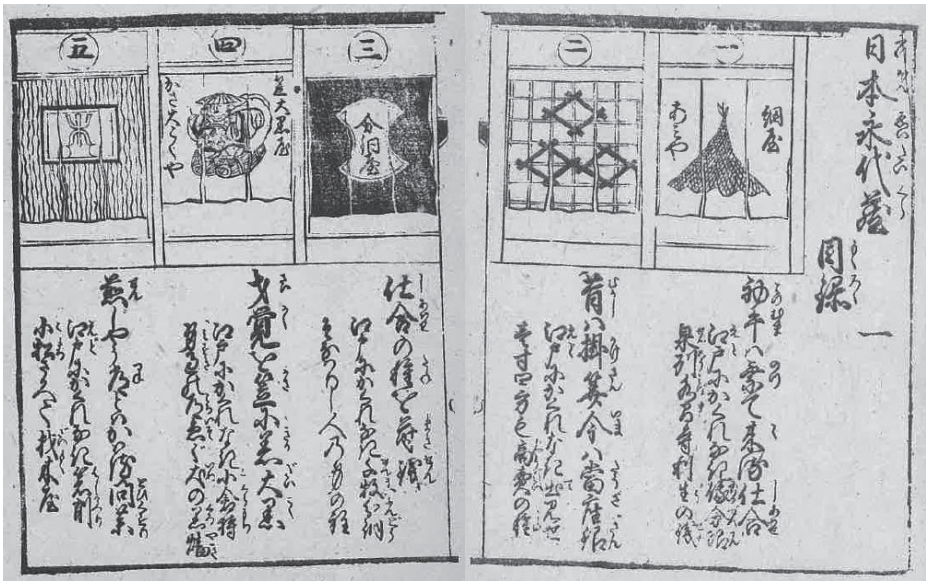
光〔さながら仏にもならるゝ心ちせり。後の世も悪からしと〕万人是を羨みける。〔人〕若時貯して年寄ての施肝要也。迚も向へは持て行

⑪す[65]」（〇十三オ）

ず〔なふてならぬ物は銀の世中〕（五オ）

【挿絵】

異版　目録



目録第一図

目録第二図

異版（巻一の一）

挿絵第二図　　挿絵第一図

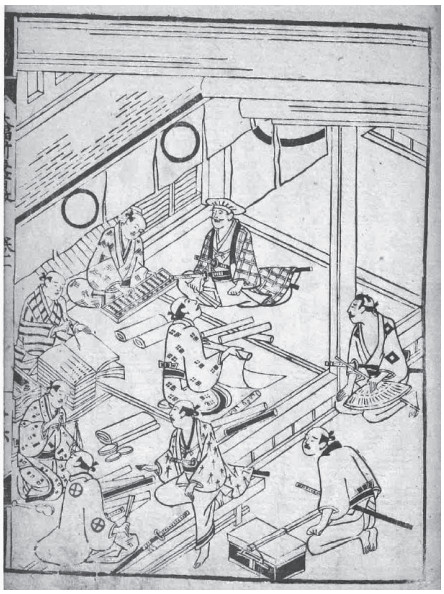
三都版（巻一の一）

挿絵第十図　　挿絵第九図

異版（巻一の二）

挿絵第三図

三都版（巻一の四）



挿絵第十一図

異版（巻一の四）

挿絵第五図　　挿絵第四図

三都版（巻四の三）

挿絵第十三図　　挿絵第十二図

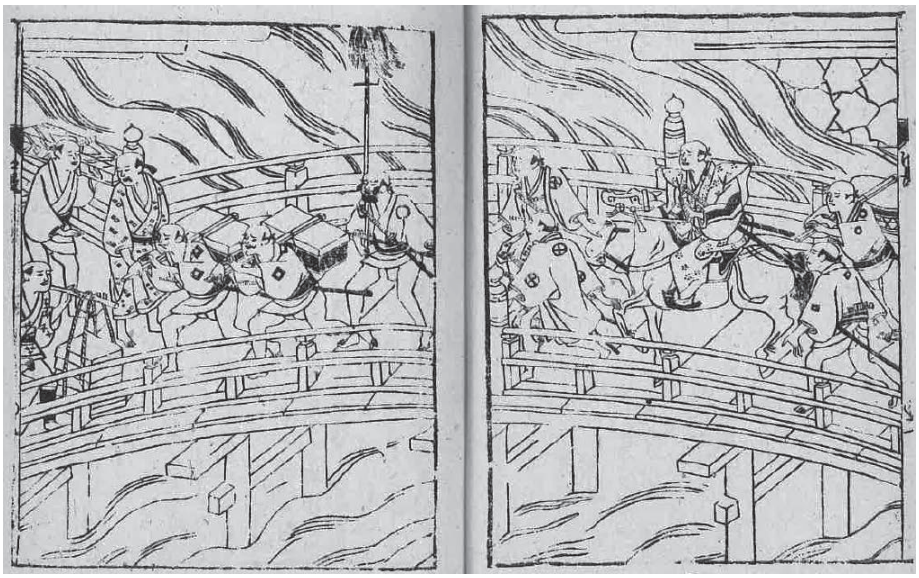
異版（同章）

挿絵第六図

三都版（巻二の三）

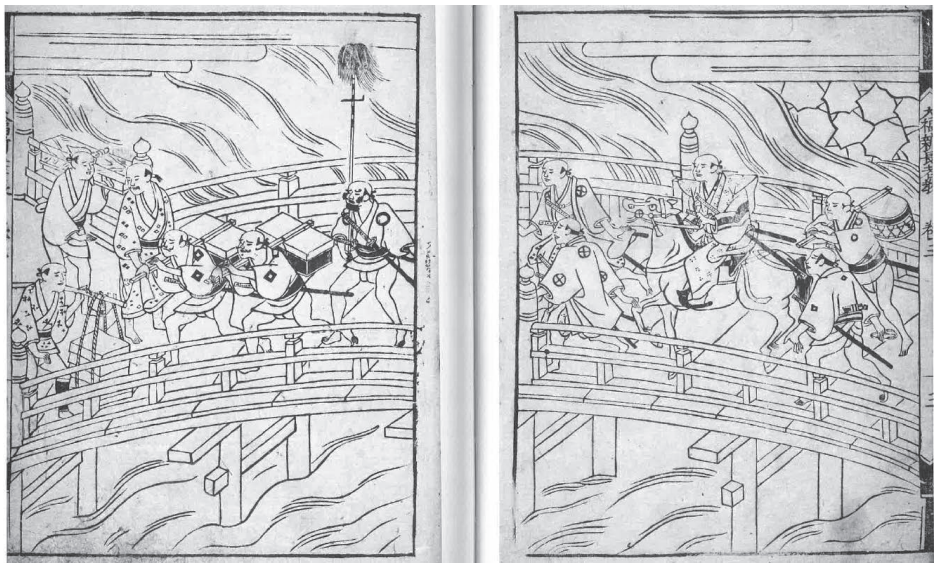
挿絵第十四図

異版（同章）



挿絵第八図　挿絵第七図

三都版（巻三の一）



挿絵第十六図　挿絵第十五図

【注】

1　『西鶴　解説』（天理図書館編、野間光辰監修、天理図書館、一九六五年刊）によれば「永代蔵の異版は、その外装は後述する如く種々あるが、版下・挿絵すべて同系で前記西沢版六冊本の版木を使用したものと認めてよい。」（一三〇頁）とある。引用に際し、表記を現在通行の字体に改めた。

2　谷脇理史氏「解説　日本永代蔵」『井原西鶴集』第三巻（谷脇理史・神保五彌・暉峻康隆校注訳、小学館、一九九六年刊）六〇八頁より引用。

3　中嶋隆「西鶴とメディア――『日本永代蔵』異版をめぐる出版状況――」『江戸文学と出版メディア』（冨士昭雄編、笠間書院、二〇〇一年刊）

4　底本の印刷不鮮明により「寺利生」に付されている振り仮名の字数が不明であったが、別本においては少なくとも「寺」に二文字、「利」に一文字、「生」に二文字の振り仮名が振られていることが確認できる。判別できる文字は底本・別本ともに「寺」の一文字目の濁点の部分と「生」の二文字目の「う」のみである。なお、底本においてもこの二か所の振り仮名ははっきりしている。

　しかし、底本・別本ともに目録の部分はほぼ三都版の原型を留めていることや、別本で確認できる振り仮名同士の間隔の開き方の様相から、異版においても三都版同様、「生」には実際、三文字の振り仮名があり、この「寺利生」の判読不能箇所の振り仮名は「でらりしや」だと考えられる。

5　底本・別本では「種」の一文字目の振り仮名は判別不可能であるが、前掲注4で指摘したように、異版の目録部分は三都版と同様の表記をしていると考えられることから、当該箇所も三都版と同じく「た」であると考えられる。

6　三都版では「心」の直後に撥音便を表す小字「ン」がつく。

7　三都版では「御」の直後に撥音便を表す小字「ン」がつく。

8　三都版では「は」はない。

9　「と」がない。

10　三都版では「し」はない。

11　三都版の誤刻。「り」は衍字である。

12　三都版では「を」はない。

13　「は」がない。

14　章題が前章の本文の末尾「歳楽と祝へり」と同行にある。

15　別本では「じ」となっている。

16　三都版では「も」はない。

17　「く」がない。

18　三都版では「も」はない。

19　別本では「万」の振り仮名が「よろづ」となっている。

20　別本では「だ」となっている。

21　別本では「ぬ」の下に句点と思われる点がある。

22　三都版では小字「ノ」は入っていない。

23　「万有帳めでたし」は通常の文字のサイズより小さめに書かれている。

24　章題が前章の本文の末尾「万有帳めでたし」と同行にある。

25 三都版の誤刻。「り」は衍字である。
26 三都版では撥音便を表す小字「ン」はない。
27 別本では「づ」となっている。
28 別本では「ぶ」となっている。
29 三都版では「を」はない。
30 「よ」は通常の文字のサイズより小さめに書かれている。
31 三都版の誤刻。二字目の「を」は衍字である。
32 別本では「ご」となっている。
33 別本では「ば」となっている。
34 別本では「び」となっている。
35 「の」がない。
36 三都版では「を」はない。
37 別本では「ぐ」となっている。
38 三都版に「うつ」はない。
39 別本では「ど」となっている。
40 別本では「だ」となっている。
41 「の」がない。
42 「の」がない。
43 別本では「ぶ」となっている。
44 「便」の振り仮名「たで」は三都版の誤刻である。正しくは「便(だて)」。
45 別本では「ご」となっている。
46 三都版では「は」はない。
47 別本では「ざ」となっている。
48 別本では「だ」となっている。
49 「丸」が誤脱している。
50 三都版では「妙薬の方組」を「△」の記号を用いて箇条書きにしているが、異版では「一」を用いている。
51 三都版では「毒断」の具体例を「○」の記号を用いて箇条書きにしている。異版では三都版と同様「○」を用いている箇所も一箇所だけ存在するが、残りは「・」の記号、もしくは記号なしである。ここでは何の記号もついていない。
52 三都版ではこの位置に「○」の記号がつくが、異版では何の記号もついていない。
53 別本では「ぐ」となっている。
54 別本では「ざ」となっている。
55 異版では、これ以降も三都版の「毒断」の具体例と対応する本文が続くが、「○」や「・」のような記号は一切登場しなくなる。
56 「少」の振り仮名「ちいき」は三都版の誤刻である。正しくは「少(わいわ)」。
57 三都版では「帰る」はない。
58 「百」がない。
59 「くつ」がない。
60 「に」がない。
61 「の」がない。
62 異版「一荷にあまるを。弐百五十文にうり」の部分は三都版「一荷にあまる程取集め其まゝ是を売けるに弐百五十文」を基に書き直されたと考えられる。

63　別本では「ぎ」となっている。
64　「也」がない。
65　別本では「ず」となっている。

〔付記〕

・資料の閲覧に際し、所蔵資料の利用を御快諾くださいました立教大学図書館に厚く御礼申し上げます。
・本研究は令和三年度植田安也子学術振興基金大学院生等研究奨励事業による助成の結果の一部である。

（二〇二一年一〇月一日受理）

（まえだ　ちほ　京都府立大学大学院博士前期課程）